

信州大学農学部構内演習林の鳥類相について

成瀬真理生（信州大学総合工学研究科）・加藤正人（信州大学農学部）

I 背景・目的

鳥類はその大きさ・さえずりなど音を発するという特徴から比較的調査が行い易く、調査方法も確立されていることから、環境指標生物としての期待が大きい。そこで本研究では信州大学農学部構内演習林において鳥類相の調査をし、生息環境との関係性について考察した。

II 材料・方法

鳥類相の調査は、ルートセンサス法を参考に、2007年5月から2010年4月の間に行った。調査時間は6時～8時の間の1時間で、定期的（月平均約2.7回）に計98回行った。調査項目は、鳥の出現位置・種名・羽数・行動・天気・特記事項である。得られたデータをArcGIS9.1を用いてデータベース化した。

III 結果・考察

全98回の調査で観察された鳥類59種、7410羽であった（表-1）。生息環境で見ると、シジュウカラやヒヨドリといった市街地から森林まで幅広い生息域を持つ種から、アカゲラやカケスといった森林性の鳥類、スズメやムクドリといった草地性の鳥類が観察されている。また、森林面積と観察できる鳥類の種数の関係性に構内演習林の面積である14.97haを代入したところ、11.46種が観察できるという結果となった。本研究の調査では樋口らと調査期間や手法が異なるものの、観察種は57種と5倍以上の種が観察されたこととなる。これは、農学部キャンパスは演習林の林地、グラウンドや畑といった草地、講義棟・生協・教職員住居といった人間の生活空間で構成されており、大学周辺にも農耕地や住宅地が広がっている。このように様々な環境が周囲に存在するため、多くの種類の鳥類が観察できたと考えられる。

表 - 1 調査結果

種	羽数	出現率	種	羽数	出現率	種	羽数	出現率	種	羽数	出現率
トビ	14	14%	ビンズイ	91	27%	センダイムシクイ	7	3%	アトリ	64	5%
ノスリ	34	32%	サンショウクイ	1	1%	キビタキ	25	25%	カワラヒワ	632	95%
サシバ	2	3%	ヒヨドリ	999	99%	オオルリ	8	7%	マヒワ	27	3%
ハヤブサ	1	1%	モズ	62	48%	コサメビタキ	9	8%	ベニマシコ	2	1%
キジバト	190	84%	ヒレンジャク	14	1%	エナガ	293	62%	ウソ	1	1%
アオバト	38	18%	ルリビタキ	13	18%	コガラ	5	4%	イカル	64	37%
カッコウ	27	25%	ジョウビタキ	17	11%	ヒガラ	20	15%	シメ	22	8%
アカゲラ	220	86%	クロツグミ	171	56%	ヤマガラ	215	82%	スズメ	419	90%
コゲラ	169	86%	アカハラ	21	15%	シジュウカラ	1814	100%	コムクドリ	76	33%
ヒバリ	4	5%	シロハラ	21	11%	ゴジュウカラ	7	8%	ムクドリ	214	32%
ツバメ	80	29%	ツグミ	85	23%	メジロ	194	67%	カケス	144	73%
イワツバメ	7	3%	ウグイス	26	29%	ホオジロ	233	86%	オナガ	30	8%
キセキレイ	67	45%	オオヨシキリ	2	3%	カシラダカ	178	32%	ハシボソガラス	115	41%
ハウセキレイ	63	48%	メボソムシクイ	4	4%	ミヤマホオジロ	27	8%	ハシブトガラス	95	55%
セグロセキレイ	10	8%	エソムシクイ	10	7%	アオジ	7	8%			